

復活徹夜祭 (ルカ 24:1-12)

開かれた手を受け入れ、和解のために働こう



主の御復活おめでとうございます。毎年同じ事の繰り返しですが、復活徹夜祭の説教は、聖金曜日説教準備の後30分も経たずに取りかかっています。人間的なことを言うと、さっきまで「十字架の手は開かれていますよ、あなたはこれを見てどう答えますか」と考えていたのに、切り替えが早いなあという思いがあります。

そしてこうも思います。復活徹夜祭の福音朗読は、A年こそ復活したイエスが現れますが、B年C年の朗読では「天使の出現」と「空の墓」で延々、復活おめでとうございますと説教するのです。どうにかならないものかなあと思います。皆さんに言ってもしかたのないことですが。

しかし空の墓でも、香料を持って出かけた婦人たちを動かすに十分でした。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」輝く衣を着た人は、イエスは復活なさったと証言し、婦人たちを次の行動に駆り立てたのです。

それでも、婦人たちに勇気を与えている力はどこから来るのでしょうか。もちろん復活したイエスが与えてくださっているでしょうが、何か見える「しるし」があるのでしょうか。

やはり私は、金曜日の出来事をイエスとともに辿ってきた。そのことが婦人たちを行動に駆り立てているのだと思います。

婦人たちは選ばれた弟子たちよりも近くでイエスの最期を見届けました。開かれた和解の手、血まみれの手を取り、イエスによる和解に加わりました。和解のために手を開いて十字架の上で命をささげ、復活し、イエスはその手を取った人と今ここでともにいて、次の行動へと駆り立てているのです。

婦人たちの次に和解のために差し伸べられた手を取り、呼びかけに応じる相手は弟子たちです。そのため婦人たちは復活したイエスに送り出され、弟子たちのもとに急ぎました。

出来事を告げられたペトロは墓へ行き、何をなすべきかを考えます。ペトロは私たちすべての象徴です。何をすることも力が足りない私たちが、イエスのために何かお手伝いするにはどうすれば良いのか。考える必要があります。

それは、何はともあれ空の墓を訪ねて、その後復活したイエスに和解の手を差し伸べてもらい、その手を取ることで、和解のために差し出された手は、まだ釘跡の生々しい手かも知れませんが、その手に釘を押し当てたのは私の罪だったかも知れません。

そうと分かっているとしても、私たちは復活したイエスの手を取らなければ、イエスの弟子でなくなってしまう。私たちがその手に釘を押し付けたのに、それでも復活の主は私たちに手を差し伸べてくださいます。私たちはそのいつくしみによって、死んだも同然の状態から造り変えられ、復活の証人としてもらえるのです。